

原城陥落367年目の4/12に、 あらためて4万の民の心を思う。

異聞、板倉重昌記

1638年4月12日、島原の乱、367年前の原城陥落の日を前に、2014年4月10日に現地を訪ねました。原城跡や有馬晴信の居城とされ日野江城跡がある有馬町は、緑が鮮やかで、板張りながらも一夜城のお城ができていました。写真です。高さ10メートルほどです。

この島原の乱を考え直したのは、もう5年ほど前に、広島伊達工さんから教えていただいた本＝「出星前夜」(飯嶋和一)を読んだことからです。そして、その感想です。タイトルのいえば、「異聞・板倉重昌」でしょうか。

この乱は日本最大の一揆であり、それを描いた歴史小説の『出星前夜』は、幕府がいうキリシタンの宗教一揆であるとする徳川幕府に都合のいい一面的な「通説」を吹き飛ばした力作です。

その中で、歴史も飯嶋も「民が負けた」と書きます。4万人の一揆農民が幕府軍13万人の軍勢に殺されるわけですから、その通りです。

しかし、私は、歴史的評価でいうなら、彼ら農民は結果的には4万人の全てが殺された＝命の敗北とは別に、軍事的には、敵の総大将・板倉重昌を討ち取り、反乱の直接の相手、島原藩の城主・松倉勝家を斬首の刑にさせ、藩も取り潰させています。また天草・唐津藩(寺沢堅高)も天草領地4万石を没収され、自殺をして果てています。この結果は、反乱の民にとって、政治的には勝ったのだ、と私は思い始めています。これが今回の稿の背景です。

乱の経過と理由は以下です。

- 1、この乱は島原、天草近隣16ヶ村の4万の農民が武力蜂起し、徳川幕府軍13万人を相手に、4か月間も原城に立てこもり抵抗し、闘った。その幕府軍の数は、関ヶ原のときの東軍を超える軍勢でした。たかが農民一揆という当初の想定をはるかに超えた乱でした。



2、農民の乱の目的は苛政の撤廃と、キリシタン弾圧への抵抗でした。キリシタン禁止令でキリシタン大名の有馬晴信が改易されます。その後に奈良から移封された松倉勝家が島原藩の城主につきます。松倉は、自らの大名としての地位を高めるために、4万石の領地を10万石と幕府に粉飾・偽装の登録をし、農民には税を2倍に上げたことから、農民にとっては生きていけない状態で、まさに生きるための要求でした。(小学館、大系日本史)



原城跡から天草灘の談合島を見る石像軍、

3、ときの将軍・家光と幕府老中は、幕府軍の総大将に三河の国・深溝藩主・板倉重昌を指名し、鎮圧を命じます。

板倉は譜代大名とはいえ、1,5万石の小さい大名であり、外様側の細川50万石、鍋島35万石などの大大名から見ると、はるかに格下で、上使・板倉重昌の言うことなど、だれも聞かない軍勢でした。また関ヶ原で西軍（豊臣勢）として戦い、外様に置かれた鍋島藩は、この戦こそ、鎮圧の功で、立場と名誉を復活したいと焦ります。まさに武士団としての一番槍的な突撃戦をくり返す、勝手気ままに、動く不統一の軍勢でした。

幕府軍は一揆勢の抵抗の前に、乱を鎮圧できないまま、ひと月が経過し、幕府は、追加として2次の上使を派遣することを決定します。これを聞き、上使・板倉は「武士の面目が経たない」として焦り、1938年の旧暦正月元旦に、無理攻を号令し、軍は大敗北し、自らも討ち死にをします。第2次上使・松平伊豆の守の現地到着の三日前でした。

そこで、上使として派遣された幕府ナンバー2の老中・松平信綱は、知恵伊豆とのちに称される者であり、彼は戦の方針を変え、兵糧攻めをとり、3か月後に鎮圧し、4万の民を皆殺しにします。

これは昔の戦でいうと、敵の総大将の首を取った方が「勝ち」なので、幕府軍は軍事的には明らかに負けです。

4、徳川260年の歴史でいうと、300の藩で大名は3000人いましたが、その中で、たった一人、乱ののち、この島原藩の藩主・松倉勝家だけが、引責での領地没収のうえ、「斬首」という極刑にさせられました。異例中の異例です。また天草の唐津藩・寺沢堅高も領地4万石を没収され、その後、自殺しています。キリシタンの乱ならば、不行き届きだけでは斬首にはならないのです。などが、歴史です。

番外編。幕府軍上使（総大将） 板倉重政の史実と異聞。

①、徳川家康と板倉重昌の関係。

1827（文政 10）年に書かれた歴史書「日本外史」（頼山陽）によれば、この幕府軍の総大将の板倉について面白い記事があります。

大坂夏の陣の「秀頼自害す」と「大戦後の処分」の項で、「豊臣秀頼以下は、和睦も絶望となったことを知り、（大阪城に）火を放ってみな自殺してしまつた。徳川家康はすでに桜門（大阪城の南入口）まで進んできていて、秀頼や秀頼の妻・家康の孫娘の千姫の出てくるのを待っていた。伊井直孝が来て実情（秀頼自死）を申し上げ、自分の罪を請うた。家康はこれを聞いて、頷いた。その後、家康はにわかには駕籠を命じて、板倉重昌ただ一人を従えて、京都へ帰り、夜 10 時ころ、二条城へ入った。大阪にいた我が家康の諸軍は、このことを誰も知らなかった」と書きます。

私はこれに驚き、興味を感じました。

東西 30 万人を超える軍勢の激戦、大混乱の中、大阪城が落城し、豊臣の時代の終わりという、まさに歴史的瞬間に、家康は家来の諸将を誰も従えず、混乱の中、戦場を離れるだろうか。たった一人、家来の板倉重昌のみを従え、京都へ走り帰ったのです。歴史書には『雨が降るから』と家康が言ったと書かれていますが。

板倉重昌は家康の近習（秘書兼ボディガード）筆頭役、5000 石の旗本でしたが、こののち、三河・深溝藩 1,5 万石の大名となり、内膳の守（将軍の毒見役の責任者）へと出世するほど、家康の信頼の厚い人物でした。それは先の夏の陣の直後の家康と重昌の奇妙な動きで理解できます。

なぜなら、大阪や京都では掃討戦が戦われており、家康軍の諸将は、相次いで豊臣方の武将の首をはね、家康の居城=二条城に持参し、戦功を競っている最中だったのです。

②、大阪の陣の和睦役の重昌の功績。

板倉重昌はこの大阪の陣で徳川方の和睦役を務めています。

このときの経過を「日本外史」（大坂冬の陣の『豊臣秀頼和議に応じる』）では次のように書きます。

「12 月 19 日、和議が成立し、大阪城の周囲の堀を埋め、客兵（豊臣方の応援の軍）を追い払うこととした。20 日、板倉重昌が城内に入って、豊臣秀頼から



乱のあと、幕府軍によって壊された石垣群

の誓書を受け取ろうとした。秀頼が問うていうには、『両公（家康・前将軍と秀忠・現将軍のうち、どちらへさし上げましょう）』、と。重昌が答えて言うには、「大公（家康）にさし上げられる方が良い」と。そして、その誓書を持って帰った。家康は重昌が帰るのをいまや遅し、と待ち構えて、問うて言うには「それはどうしてか」と。板倉重昌はありのままを申し上げた。家康は喜んで「やはり、お前でなければ埒が明かない」と言った、と。

これは、和議の誓書の徳川方の名を誰にするのかと秀頼が尋ねたとき、重昌は「武士は二君に仕えずで、私の主君は家康公である。よって宛名は大家家康殿だ」と答えたことを、家康が感心したことからきます。二人の特別な関係がよく見えてきます。家康と重昌はこのように緊密な関係だったのです。

③、重昌は幕府軍にとって、一揆で一番殺してはならない人だった。

この1年後の1616年、すでに将軍職を退いていた家康は死去します。幕府は2代目に将軍職（1616～1632）に秀忠がついており、ついで家光が3代目として将軍（1623～1651）が継承します。

家光は1615年の大阪の陣のときは13才、1637年、島原の乱のときは34歳でした。家光としても板倉重昌の人となりは十分に知っており、重昌は確かに幕府の要職でした。だから上使に命じられたのです。

これからして、重昌は幕府にとって重要な人物であり、また近習として、家康を一番よく知っていた人でもあります。その意味では、幕府軍としては一揆に際して、一番殺してはならない上使だったのです。このような幕閣の最高責任者＝上使を討ち果たした島原の乱＝一揆は、農民の勝利であり、まさに徳川幕府にとって最大の痛手と驚きでした。

大坂夏の陣（1615年）以降、家康は年号を慶長から元和に変えて、「元和偃武（げんなえんぶ）」（武器を収めての平和時代）を宣言し、応仁の乱以降の150年に及ぶ戦国時代の終了を告げていました。しかし、この島原の乱は、関ヶ原の合戦以上の徳川軍の動員が必要でした。これに驚いた幕府は、これ以降、キリシタン禁止令の強化と鎖国へ向かいます。それはそれまでの時代、戦国時代の常識、領地・領民の生殺与奪権を握っていた領主支配のありようを正して、武家諸法度で、「領民の殺傷禁止」と変わり、1868年の明治維新まで、徳川幕府は続きます。



④、板倉重昌と重宗兄弟

歴史の妙を一つだけでいうと。

板倉重政が島原の乱鎮圧の幕府軍の上使に任命されたとき、周囲は、総大

将がたかだか 1,5 万石の大名では…、とバカにします。当時の大名は 1 万石で経済的には、家来（兵・軍隊）を 250 人ほど持てたとされています。また幕府の規則でも 200 人ほどでした。だから、重昌個人としてはせいぜい 400 人の軍勢しか島原に同行、派兵できませんでした。

重昌は父・板倉勝重の二男です。重昌の兄の板倉重宗は下総関宿 5 万石の大名で、京都所司代を務め、大阪の陣のときに京都を守り、天皇や家康らを守り、のち、幕府老中の伊井直孝らと同格の地位を得ています。そしてその兄は、この弟重昌の島原出兵の際に、兵を 600 人ほど貸し、重昌は合計 800 人で島原へ向かっています。当時の話では、せめて上使が兄の板倉重宗ならば…と言われたそうです。

⑤、鍋島藩から見た島原の乱

今度は、幕府軍の鍋島藩から見た島原の乱です。この乱で一番影響を受けたのは島原の隣の肥前・鍋島藩でした。理由は鍋島藩がこの島原半島北部、島原の隣の神代 4 ヶ村（6 千石）を領有しており、幕府からも「監督不行き届き」と叱責を受けています。この経過を「葉隠」を題材とした「葉隠物語」や、「佐賀藩」（現代書簡）から見てみます。

1)、鍋島勢が軍役規則の 5 倍の軍勢で島原へ。

島原の乱の始まった翌日（1637 年 10 月 27 日）、すでに島原の松倉家は鍋島家に「救援」の要請文を届けています。このとき鍋島の領主・勝茂は江戸にいて、幕府に「帰国要請」をしますが、「それには及ばずと」却下されます。

しかし、関ヶ原で西軍に立ち、敗北した負い目をはねかえすために、華々しい働きで自身の面目と、幕府の信用と取り戻すべく、佐賀の現地の家来に以下のような命令の書状を送ります。

勝茂は「当家一手にて一揆勢を攻め滅ぼす覚悟で支度せよ。事がならずば、全員島原で屍をさらせ」と檄を飛ばしています。

普通でいうと幕府の軍役（徴兵）規定では、百石で

2～3 名ほどですから、35 万石でも 7000 名が普通でした。しかし、このとき鍋島勝茂は近隣の各鍋島家に 5 倍の数の 10 人の軍役を課し、3 万を超える軍勢になります。勝重の力の入れようは、名誉挽回への異常さでした。

12 月 1 日、佐賀藩・鍋島勢は、3 万 4 千人の軍を神代に勢ぞろいさせ、上使・板倉の到着を待ち、上使と共に原城へと進軍しています。しかし、ひと



3・18 郵産ユニオン長崎中郵のストライキ集会

月たっても原城は落ちませんでした。幕府軍の敗北は鍋島家の敗北でもあります。

上使・板倉の正月元旦の無理攻めで、鍋島の軍勢は 380 人の死者を出し、2100 人の手負いを出しています。このことを江戸で聞いた藩主・勝茂は、自ら現地へ赴くことを再度幕府へ願い出て、島原へ急行します。

2)、勝茂近習の鍋島大膳が一揆派の軍記を奪取。

このとき、留守居役を命じられていた勝茂近習の鍋島大膳は、「この首をかけ、殿の前で討ち死にし、お役に立ちとうございます」と、同行を願い出ますが、勝茂はこれを許さず、「江戸の大事を守れ」と言い渡し、大膳を残し、江戸を立ちます。

そして勝茂は原城前に陣取り、いよいよ明日が原城総攻撃の日となるとき、のち、島原の乱一番槍の勇将と語られる石井弥七左衛門が、勝茂に「牢人を一人雇いたい」と願い出ます。聞けば、江戸で勝茂に同行を願い出た鍋島大膳でした。大膳はこっそり牢人になり、鍋島軍に同行し、合戦に参加していたのです。勝茂は激怒し、切り捨てを命じますが、石井はそれを聞かず、大膳は合戦に入ります。

いよいよ、原城が落ちるとき、一番攻めは、上使・信綱の作戦命令の刻限を無視して、勝手に突撃を始めた鍋島勢で、その先頭に石井弥七左衛門一行があり、その先頭が鍋島大膳でした。この大膳は一揆勢の軍旗を奪い取る功を上げ、一番乗りとなります。(これは公認の記録です)。

しかしこの功とは裏腹に、藩主・勝茂の怒りは収まらず、大膳は禄を没収され、妻(勝茂の養女だった)とは離縁させられ、当時の辺境地・松浦郡山代(現在の伊万里市山代)へ流罪となり、その地で食を絶ち、不遇のうちに死んだと書かれています。

3)、幕府が鍋島勝茂に閉門蟄居の処分。

この島原の乱での幕府軍の死者は、1640 人、負傷者は 9297 人とされますが、鍋島の軍では、死者 620 人、負傷者 3034 人とされます。ほぼ全体の 3 分の 1 ほどの犠牲を払いました。この数の異常なまでの多さを、勝茂の「関ヶ原の負い目を晴らす」異常さ(功を焦り、突撃をした)にあったと、「葉隠」には書いています。

この乱ののち、鍋島勝茂は、一番乗りの戦功にも関わらず、上使軍命違反で幕府の詮議を受け、処罰を受ける立場になります。勝茂は切腹を覚悟し、江戸に赴きます。

上使を務めた老中・松平伊豆の守は「勝茂の遠島、藩の



江戸時代の旧長崎街道、日見峠の細道です。

改易」を主張しましたが、老中から参考人として意見を求められた大久保彦左衛門が、「戦機を見極めることは戦場にいるものしかできない。城を落としたのは鍋島勢の働きだ」と弁護し、「もし厳罰に処したら、鍋島武士3万は肥前一国を砦にして幕府に立ち向かうだろう。原城でさえ容易に落とせなかったのに、どうするのだ」と、信綱のやり方を批判したとあります。

結果的に、幕府の鍋島勝茂への処分は「出仕停止、閉門」でしたが、それも半年後には解かれました。これが原城一揆の鍋島藩から見た、勝利者の歴史です。

⑥、「日本外史」は259冊の軍記、歴史書をもとに書かれた。

1827（文政10）年、「日本外史」を、元老中・松平定信の求めに応じて献上した頼山陽は、その著のなかで、「日本外史引用書目」として、実に259冊の署名を上げています。神皇正統記、承久記、足利治乱記、応仁略記などがズラリと並びます。

1800年ころ、大量出版のない時代、こうした多くの歴史書や軍記などの全てに目を通す知識人の努力に驚きます。学問とはこうしたことでしょうか。

しかし、残念ながら、「板倉重昌軍記」という書名はありません。それは彼が島原の乱で戦死しているからでしょうが、どこかで、これに近い書物などを探し出し、なにかわかれば…などと考えています。

⑦、「大義は我にあり」は、現代に通じる。

最後に、強権による苛政と不条理なキリシタン弾圧に怒り決起した島原、天草の農民ら4万人の民の思いは、最後は「皆殺し」という無残な結果に終わりますが、幕府の動揺がそれほど強かったともいえます。

しかし、一揆民の思いは、「大義は我にあり」であったことでしょうか。結局、秀吉時代から江戸年間（300年）に、680回の農民一揆がおき、反乱の旗印は、ついに徳川幕府を倒します。

また、このとき反徳川の雄藩らが、尊王攘夷で結集し、新時代を求めます。

その源流が、1800年代の国学者の尊王思想の学問にあることもまた自明です。そのなかでも頼山陽は、日本の歴史を、源平の時代から起し、武家政権の不当性と尊皇でまとめています。結果的にこれが王政復古、明治政府樹立へつないだのです。

なぜそうなのか。
確かに頼山陽は農



民解放を求めてはいませんから、現代から見ると、過去の思想です。

しかし、まだ徳川絶対の時代＝明治維新の70年も前（坂本竜馬などよりはるかに前）に脱藩し、処刑覚悟で武士を捨て、時代変革をめざした命がけの頼山陽の姿は、別格でした。既存の体制と権力の矛盾に抗い、次の時代を見据える。これが確かな歴史観です。

ひるがえり、現代社会の身分制度、非正規という身分格差も、これと同じです。私たち郵政産業労働者ユニオンのストも現代の不条理への異議申し立てです。

被支配の弱者であっても、納得いかない攻撃には抵抗し、闘ったものが最後には勝利する。それが島原の乱の決死・反乱、一揆の願いだったと思います。長い時間が経ちましたが、いま、「あなた方が正しいよ」と声をかけ、無念の中に命を落とした多くの民に、「ご苦労様でした」とする歴史観があってもいいと思います。それが、長崎に生き今を闘う私たちの責任かもしれません。歴史に未熟なことはご容赦を。

2014/4/15
中島義雄

※ 資料についての引用は、

- 1、日本外史、(上・中・下巻) 頼成一訳、岩波文庫。
- 2、日本外史を読む、(5巻)、高藤一男編著。新日本出版社。
- 3、日本史大系、(小学館)
- 4、「出星前夜」飯嶋和一 (小学館)
- 5、日本歴史「古典籍」総覧、別冊歴史読本、
- 6、日本史年表 (河出書房新社)
- 7、日本史年表 (岩波書店)
- 8、「島原の乱」(中公新書) 神田千里著。
- 9、「葉隠物語」(日経文芸文庫) 安倍龍太郎著。
- 10、「佐賀藩」(現代書簡)

※、写真の説明。

- 1、原城一揆祭り (4/12) のために建てられた板張りの一夜城。
- 2、原城跡公園から談合島と天草を見る石像。十字架をもっている。
- 3、原城跡の遺跡、一揆の後、幕府軍が空堀に投げこんだ石群。
- 4、原城本丸の案内標識と天草灘。
- 5、2014/3/18 郵産ユニオンのストライキ。長中門前。
- 6、江戸時代の旧長崎街道、日見峠付近。今でも道幅1メートルほどの急坂だ。
- 7、長崎の港。坂本竜馬の像が経つ風頭公園から見る、女神大橋。

1630年代、幕府は数回の鎖国令を出し、長崎港の入り口にあたる女神大橋の下付近の海に船1000隻をつなぎ、実力封鎖を行い、鎖国が始まる。

この長い間、日本は唯一、世界へ開く窓をこの長崎以外公的には持っていなかった。長崎の風は、進取、開国で、西洋へ向けて、吹いていたことでしょう。